# 【提出様式】　令和６年度　豊島区立学校　学校評価　自己評価表

## 豊島区立　巣鴨小　学校

| 評価対象者数　（人） | | | |
|---|---|---|---|
| 児童・生徒数 | 保護者数 | 教職員数 | 地域の方 |
| 192 | 111 | 16 | 27 |

| 領域 | 豊島区教育ビジョン2019 基本方針等 | 評価番号 | 評価項目 | 年間評価 児童・生徒 4 | 3 | 2 | 1 | 保護者 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | 地域 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | 教職員 4 | 3 | 2 | 1 | 自己評価概要 | 学校関係者による評価 学校関係者評価の意見 | 標語 | 次年度に向けた改善策 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ | 就学前から小学校・中学校への円滑な接続 | Ⅰ－１ | 学校は、関係諸機関等(保育園や幼稚園、小学校、中学校)と連携を図ろうとしている。 | | | | | 52 | 44 | 5 | 1 | 9 | 16 | 9 | 0 | 0 | 2 | 8 | 8 | 0 | 0 | スタートカリキュラムを活用し、1年生は段階的に小学校に慣れることができている。また、「巣鴨のよい子」「巣鴨小スタンダード」で基準を決めて指導をしている。また、昨年度までと同様に近隣の保育園への校庭開放、保育園児の小学校体験、６年生の中学校体験を実施している。 | 幼・小・中の連携に関しては、豊島区の方針に沿った切れ目のない教育体制が整っていると見受けられ、しっかりとした指導が行われていると感じている。可能な限りの連携を図ろうと努力している姿勢を今後も継続することを望む。 | A | スタートカリキュラムは、今年度の実施状況を踏まえて、内容を修正・変更していく。また、近隣の保育園への校庭開放、保育園児の小学校体験、６年生の中学校体験などを実施し、幼保小中連携及び小小連携を進め、切れ目のない教育を推進していく。 |
| Ⅱ | 確かな学力の育成 | Ⅱ－１ | 学校は、子どもの学力の定着・向上のために、分かりやすい授業を行っている。 | 児童・生徒を対象としたアンケート集計表をご参照ください。 | | | | 59 | 42 | 4 | 1 | 5 | 16 | 9 | 0 | 0 | 2 | 10 | 5 | 1 | 0 | 「認め合い名人」の活用、「巣鴨会議」の実施、各学年における様々な体験活動の計画、デジタル教科書を使用した授業展開、タブレットを用いた学習活動の実施など、多くの場面でICTを活用したり体験的で分かりやすい授業の工夫を意識して取り組んだりすることができている。しかし、教員の経験による使用差や指導差がまだあるところや、児童の情報モラルにおける知識と意識が希薄なところに課題が残る。 | ICTのみに頼らない、体験活動とのバランスを取っていると認識している。例えば「巣鴨会議」のように、全校児童が集まって話し合うことは、どの学年にもそれぞれの学びがあると思う。<br>座学だけでなく体験を重視する取組が強調されているが、ICTの活用についてはクラスごとに差があるかもしれない。<br>全体として、確かな学力の育成に注力していることが示され、教員と児童の両方のアンケートから問題点や課題の指摘が行われていることから、真剣な姿勢がうかがえる。 | A | 校内でのICT研修の実施や、資料や教材の共有を行い、教員の経験による使用差や指導差のないように連携していく。タブレットの使用に当たっては、インターネットを使用する上でのルールやマナー、人権、著作権、個人情報の扱いなどを学ぶ場（セーフティ教室）を設定し、正しい知識と態度をもって取り扱えるように指導計画を考えていく。 |
| | | Ⅱ－２ | 学校は、ＩＣＴ機器やタブレット端末等の活用により、分かりやすい授業の実施や子どもの学びの意欲の向上に取り組んでいる。 | | | | | 66 | 31 | 7 | 1 | 6 | 13 | 7 | 1 | 0 | 6 | 11 | 5 | 0 | 0 | | | | |
| Ⅲ | 豊かな心の育成 | Ⅲ－１ | 学校は、道徳科の時間を含めた全教育活動をとおして、互いの良さを尊重し合う温かい学校づくりを推進している。 | | | | | 65 | 39 | 3 | 1 | 3 | 13 | 9 | 2 | 0 | 3 | 9 | 6 | 1 | 0 | 児童発信で、挨拶運動の取組を行っている。道徳の学習をはじめ、様々な学習活動や特別活動の経験から培われた結果だと考えられる。思いやりや相互理解、いじめの防止などの授業を重点的に毎学期行っている。「認め合い名人」の活用や話合い活動を通して、一人一人の考えを大切にし、互いのよさを認め合うことを指導している。また、校内にいる生き物や、育てている植物の観察やお世話を通して、身近に動植物を感じられるようにしている。 | 学校を訪れた際、子供たちからの気持ちのよい挨拶にうれしさを感じる。人と人が認め合うことを大切にする教育の効果が現れていると考える。<br>「認め合い名人」を活用することで、児童は自己啓発や成長の過程での発見や気付きが得られ、豊かな心や人間形成に寄与している。このように、広い視野をもち、心を育む教育姿勢が感じられるのも特筆すべき点である。 | A | 引き続き、思いやりや相互理解、いじめの防止などの授業、「認め合い名人」の活用、話合い活動を意識して取り組んでいく。また、行事ごとに異学年と交流したり、巣鴨っ子のよいところをカードに書いて認め合う活動「すがもザ・レインボー」の作成・掲示をする活動も引き続き行う。お互いを尊重し合い、思いやりの心を育むために、全校でお互いのよさを認め合える場の設定を行っていく。 |
| | | Ⅲ－２ | 学校は、生命を大切にする態度や思いやり、優しい心を育てている。 | | | | | 47 | 50 | 3 | 1 | 10 | 14 | 7 | 3 | 0 | 3 | 10 | 5 | 1 | 0 | | | | |
| Ⅳ | 健やかな体の育成 | Ⅳ－１ | 学校は、子どもの体力向上や健康の促進に、積極的に取り組んでいる。 | | | | | 61 | 40 | 6 | 1 | 3 | 14 | 8 | 2 | 0 | 3 | 5 | 10 | 1 | 0 | 曜日によって遊び場所を学年で分け、「校庭」「体育館」「屋上」を開放することで、全ての休み時間で思いきり体を動かして運動や遊びができるようにしている。郷土料理、各国の料理、行事にちなんだ料理など、給食のメニューが工夫されている。また、給食委員会による献立の放送や「もぐもぐ祭り」の実施、給食だよりの発行や、食材の皮むきなど、様々な取組を実施している。 | 休み時間のチャイムが鳴ると、子供たちは元気に外に出て遊んでいる。給食はメニューが工夫されており、食事の楽しさも感じるだろう。<br>限られたスペースを上手に活用し、遊び場を分散させることで十分な活動が保証され、事故予防にも寄与していると考える。児童と一緒に遊ぶ教員がいることで、クラスの状況をより理解できるという点も評価される。 | A | 全校で取り組む体育的な活動（共通のなわとびカードや持久走カードを使用した取り組み）を増やし、学校全体で体力の向上を目指していく。栄養士をはじめ、食育リーダーや給食委員会を中心に、様々な食材に親しみ、食に対する興味や関心も深められるように食育活動を計画していく。 |
| | | Ⅳ－２ | 学校は、充実した食育指導を通して、健康教育に取り組んでいる。 | | | | | 80 | 22 | 3 | 0 | 6 | 14 | 8 | 1 | 0 | 4 | 9 | 7 | 0 | 0 | | | | |
| Ⅴ | 一人一人を大切にする教育の推進 | Ⅴ－１ | 学校は、いじめ防止等（未然防止、早期発見、早期対応）に学校全体で組織的に対応している。 | | | | | 52 | 34 | 8 | 1 | 16 | 12 | 6 | 3 | 0 | 8 | 12 | 4 | 0 | 0 | いじめアンケートを取り、全ての学級で時間をかけて全員面談を実施している。全員面談を実施することで、アンケートに記入していない児童も担任と話す機会が確保され、児童の気持ちや考えの理解につながっている。また、アレルギーや、特別に支援を要する児童においては、保護者や関係機関と連携を密に取りながら、実態に応じた支援を行っている。各学級の情報が学年どまりであり、職員全員で共有する意識が弱かった。 | 訪日外国人の児童に対する支援状況を可視化することが提案されている。また、全員面談は、子供たちの気持ちや考えを理解する上で、非常に有意義である。大変な労力であり教師に敬意を表す。<br>特別支援教育に関して、保護者の「分からない」という回答が21%に達しており、これは高い数値であり、特別支援教室に対する理解が不足している可能性がある。更なる分析が必要だろうが、評価そのものは妥当である。 | A | 学期初めの「心の健康アンケート」、６月・１１月・２月の「いじめアンケート」に併せた個別の全員面談を、来年度も継続して実施していく。不登校傾向や学習に不安のある児童の保護者に対して、個人面談以外にも、電話で連絡を取ったり、定期的に面談をしたりしながら家庭との連携を充実させていく。生活指導夕会においては、各学年止まりとならないよう、まずは生活指導主任に報告の上、顔写真をもとに課題や情報を共有していく。外国にルーツをもつ児童への支援に当たっては、日本語指導員と連携を図り居場所作りに努めていく。例年「アレルギー対応」に該当しない保護者は「当てはまらない」の項目がないため「分からない」を選択せざるを得ない状況にあり、必然的に「分からない」の回答が多い状況である。経年変化も考慮しつつ「設問を再考」することも視野に検討していく。 |
| | | Ⅴ－２ | 学校は、子ども達の気持ちを理解するために、一人一人に寄り添いながら、指導を行っている。 | | | | | 60 | 39 | 7 | 1 | 4 | 14 | 6 | 2 | 0 | 5 | 10 | 6 | 0 | 0 | | | | |
| | | Ⅴ－３ | 学校は、特別支援教育や発達障害等に関して、一人一人に適切な指導を行っている。 | | | | | 52 | 32 | 2 | 2 | 23 | 15 | 2 | 3 | 0 | 7 | 11 | 5 | 0 | 0 | | | | |
| Ⅵ | 教師力の向上と魅力ある学校づくり | Ⅵ－１ | 学校は秩序があり、子ども達は落ち着いて学校生活を送っている。 | | | | | 57 | 39 | 6 | 3 | 6 | 14 | 8 | 1 | 0 | 4 | 8 | 6 | 2 | 0 | 行事の反省や学校評価など、欠かさずにアンケートを実施し、次年度の実施計画に反映させている。しかし、アンケートの回収率があまり高くないことや、あまり共通理解されていないと感じる職員もいる。 | 授業参観を通して児童たちが落ち着いている様子やクラスのよい雰囲気が見受けられ、これらは教師の努力が反映されている結果である。<br>アンケートの結果から、学校が保護者や地域の意見を反映していることがよく理解できる。<br>教職員評価には悪い項目もあったが、教職員ごとの異なる状況が影響しているため、全体での問題解決の必要性があると感じられる。 | B | アンケートの実施においては、引き続き行っていく。アンケートの回収率を上げるために、回答方法を複数用意（紙面、グーグルフォーム）したり、回答期間に余裕をもったりと工夫していく。<br>校内での情報共有においては、大切な情報は職員全員で共有する場や時間を確保する。 |
| | | Ⅵ－２ | 学校は、保護者や地域の方の意見や要望を受け止め、学校改善に生かしている。 | | | | | 64 | 39 | 4 | 1 | 3 | 15 | 7 | 0 | 0 | 5 | 8 | 5 | 1 | 2 | | | | |
| Ⅶ | 家庭・地域との連携 | Ⅶ－１ | 学校は、学校や子ども達の様子を、学校だよりやホームページ、学校公開等によって、分かりやすく伝えている。 | | | | | 70 | 35 | 4 | 2 | 0 | 19 | 6 | 2 | 0 | 2 | 13 | 3 | 0 | 0 | 日常の授業風景や行事など、各担当が定期的に更新することができている。また、学年便りはクラスルーム配信に切り替えたことで、保護者にはより新鮮な情報を発信することができている。保護者による学校評価でも、現項目において９割の保護者から「そう思う」「ややそう思う」という回答が得られている。 | 毎月学校から送られる学校だよりで、学校の様子がよく分かる。加えて、特に一面が秀逸である。<br>また、ホームページやクラスルームを利用することで、保護者はクラスの様子がより分かり、評価も高いことが確認できる。<br>職員間での共有も欠かさず行っていると思われ、これからもこの取組を継続することを期待する。 | B | ホームページの学年記事更新頻度は、学年によって若干差が見られた。月に一度は更新できるように、担当から各学年に呼びかける。また、ホームページは地域向けでもあることから、日々の保護者用クラスルームの配信内容と同様でも構わない旨を全体に周知し、更新頻度を高めて、「開かれた学校」づくりに取り組む。 |
| | | Ⅶ－２ | 学校は、家庭や地域と協力しながら子どもを教育している。 | | | | | 65 | 36 | 1 | 1 | 8 | 19 | 5 | 0 | 0 | 3 | 10 | 5 | 1 | 0 | | | | |
| Ⅷ | 特色ある教育活動 | Ⅷ－１ | 学校は、友達の思いや考えを受けとめるとともに、自分の思いや考えを伝えられる子どもを育てる指導の工夫をしている。 | | | | | 54 | 41 | 5 | 2 | 9 | 15 | 7 | 3 | 0 | 2 | 8 | 8 | 0 | 0 | 話合い活動を多く取り入れ、児童が主体的に学習に取り組めるよう、話合いの時間を確保することも心掛けている。また、「巣鴨のよい子」で発言のルールを共通化することで、経験による指導の差がないように授業を行うことができている。そのため、高学年になるにつれて、話合いのスキルも上達してることが学習や行事等の場面で感じることができている。 | 話合い活動を多く取り入れていることへの非常に高い評価がある。高学年の子供たちのしっかりとした姿勢も高く評価されている。今後も巣鴨小の独自の特色ある活動が続くことを願っている。 | A | 全校で学校の課題を話し合う「巣鴨会議」を引き続き行い、児童が主体的に学習に取り組めるようにしていく。教職員が替わっても、巣鴨小学校の学習規律やルールに指導の差がないように、情報を引き継ぎながら共有していく。 |
| Ⅸ | 働き方改革 | Ⅸ－１ | 学校は、校務支援システムの活用や「チーム学校」を意識した業務分担等により、組織的に業務の効率化・最適化を目指して取り組んでいる。 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 8 | 4 | 3 | 年度当初に分掌の改善を図ったことで、昨年度よりは均等に仕事の分担ができていると感じてる教職員は増えてきた。しかし、担当している仕事の時期が重なっていたり、複数で担当できていなかったりすることから、業務内容をしっかりと把握できていないまま進めてしまっている現状もある。 | 先生方が多忙で人数不足の状況がうかがえる。教職員のアンケート結果を鑑みると、改善すべき重要なポイントが浮かび上がる。目標達成の水準を共有することが難しく、異動がある中では正確な自己評価と、それに対する評価も妥当性が問われる状況である。 | B | 教職員の人数に合わせて分掌組織を再編成する。主幹、主任教諭、教諭を各分掌に合わせて適切に配置することで、効率よく仕事が進められるようにする。また、分掌の再編成に伴い、会議を精選し、教職員に授業準備の時間や分掌相談の時間など取っていく。 |

※学校関係者による評価の評語は、自己評価結果について以下の視点で行う。　A　評価は妥当である　　B　評価はおおむね妥当である　　C　評価は妥当ではない　　D　評価方法を見直す必要がある